

邑南町植野屋製鉄関連資料

—『古来の砂鉄製錬法』所収 坂の鍛冶屋をめぐる—

角 田 徳 幸

-
- | | |
|--------------|------------|
| 1. はじめに | 3. 寄贈資料の概要 |
| 2. 坂の鍛冶屋をめぐる | 4. おわりに |
-

1. はじめに

俵國一著『古来の砂鉄製錬法』は、砂鉄の採取から製鉄場の諸設備、鋳押（和鋼製造法）、銑押（和銑製造法）、錬鉄（庖丁鉄）製造法まで、たたら吹製鉄を体系的に記録した製鉄史研究の基本文献である（俵1933）。このうち、たたら吹製鉄の主製品である錬鉄（庖丁鉄）の製造法は、鳥取県日野郡都合山鉦に併設された大鍛冶屋の調査を基にするが、一部に島根県邑智郡坂の鍛冶屋についても記載がある。坂の鍛冶屋では、和鋼博物館が保管する俵の収集資料と併せて検討した結果、当時一般的であった都合山大鍛冶屋の製造法とは異なる方法で錬鉄の製作が行われたことが明らかになっている（角田・高岩2014）。このことは、錬鉄製造法の多様性、あるいは地域性を検討する上で注目されるが、邑智郡市木村に所在した坂の鍛冶屋がどこにあったのかについては所伝がなく、不明のままであった。

坂の鍛冶屋は、多くの鉦・大鍛冶屋がそうであるように、「坂」という地名が名称として冠されている可能性が高い。そこで、2015年に邑南町教育委員会生涯学習課長（当時）能美恭志氏らの協力を得て、市木地内の小字を検索したところ小武家城地区に「坂」があることが判明した。能美氏の聞き取りによれば、付近には植野屋と呼ばれた鍛冶屋があったとされることから、『古来の砂鉄製錬法』所収の坂の鍛冶屋は植野屋であった可能性が考えられる。植野屋の後裔に当たる広島県北広島町新庄の植田勲氏宅には、鍛冶屋当時から伝わる銑鉄製の神像と燭台が残されていた。これら植野屋製鉄関連資料につい

ては、今年度、古代出雲歴史博物館が植田氏より寄贈を受けた。

本稿では、坂の鍛冶屋の所在地について検討するとともに、坂の鍛冶屋で祭られた金屋子神であった可能性も考えられる植野屋製鉄関連資料について報告したい。

2. 坂の鍛冶屋をめぐる

（1）『古来の砂鉄製錬法』所収の坂の鍛冶屋

坂の鍛冶屋は、『古来の砂鉄製錬法』の中では、錬鉄（庖丁鉄）の製造法の項に取り上げられる。挿図として「第七十図 石見国坂の鍛冶屋下げ鉄（炭素量分布見取り図）」、「第七十一図 石見国坂の鍛冶屋卸し鉄（炭素量分布見取り図）」が掲載されており、大鍛冶における脱炭作業の状況を読み取ることができる。また、作業については「石見国邑智郡市木村坂の鍛冶屋に於いては、下げ場にて一回に二百二十五キログラムを処理して下げ鉄を造り、本場にては下げ鉄に少量の鋳を加え、一回に約十キログラムを卸して錬鉄を製造す。」と略述される（俵1933）。

和鋼博物館には、俵が調査の際に収集した資料が保管されており、坂の鍛冶屋のものには和銑・鋳・みつぎり・左下鉄・卸し鉄・鍛冶滓がある（角田・高岩・東山2011、角田・高岩2014）。このうち、左下鉄と卸し鉄は『古来の砂鉄製錬法』所収の第七十図・第七十一図の原資料である。

俵の記述と収集資料から考えられる本場作業は、約10kgの卸し鉄を3つに切り分けて「みつぎり」とし、そのまま打ち延ばして3本の錬鉄とするものである。これは約30kgの卸し鉄を4つに切り分けて

「四つ放し」とし、打ち延ばした後に、さらに中軸線に割目を入れ分割して計8本の鍊鉄を作る都合山大鍛冶屋の製作法とは大きく異なる。近世以降の鍊鉄製作法としては、後者が一般的であり、坂の鍛冶屋では特徴的な鍊鉄の製作が行われていた(角田・高岩2014)。

(2) 坂の鍛冶屋の所在

邑智郡市木村は、現在の邑智郡邑南町市木と浜田市旭町市木にまたがる地域である。坂の鍛冶屋と呼ばれた大鍛冶屋は、町誌や遺跡地図などの基礎資料にも記載は見られない。

旧市木村の『土地台帳』で「坂」という小字を調べたところ、邑南町市木の小武家城地区に「坂」が存在することが判明した。字「坂」は347番地で、地目は田、1889(明治22)年1月調製の切図によれば水路が引かれていたこともわかる(図2)。松江地方務局浜田支局の『土地台帳』には、1894(明治27)年11月10日に植田藤太が購入した記録がある。

「坂」は、現状では水田となっている。分布調査した範囲では、大鍛冶場の関連遺物は確認できなかった。「坂」より南南東120~130mのところには、檜木大鍛冶屋跡がある。水田の法面に鍛冶滓が多数見られたことから、大鍛冶屋跡と推定されている。

「坂」付近にあった鍛冶屋、植野屋は、小字でも確認できる。字「上野屋」は352番地で、地目は宅地、「坂」の隣に位置する。1898(明治31)年8月4日に植田タネが相続し、同月13日に植田藤太が譲り受けた記録がある。藤太とタネは夫婦で、現当主勲氏の曾祖父母に当たる。植野屋は、邑南町市木から広島県北広島町大朝へと向かう旧街道に面したところにあった。ちょうど、道が緩い上り坂から下り坂になるところで、「坂」はその隣接地であった。

俵國一が調査のため市木村を訪れたのは、1898年9月5~6日のことである⁽¹⁾。前述の『土地台帳』によれば、「坂」・「上野屋」は植田藤太の所有であった。植田家の所伝によれば、植野屋はもともと鍛冶屋であったが跡取りがなかった。そのため、川戸(江津市桜江町)の川口藤太に嫁いでいたタネを市木に呼び戻し、藤太を婿養子として迎えた。植田

家では、藤太は刀鍛冶であったと伝えられている⁽²⁾。植野屋が鍛冶屋を家業としたのは、藤太の代までであった。その後、植田家は広島県山県郡北広島町に転居したが、家と蔵は邑南町市木から移築したものであるという。

植野屋が鍛冶屋であったことは確かであるが、「坂の鍛冶屋」と呼ばれていたことを示す史料はない。一方、俵國一の実家、浜田の俵家にとっては、植田藤太の出身地である川戸はゆかりの深いところであった。國一の父、三九郎祐信は川戸にほど近い邑智郡谷住郷村(江津市桜江町)から俵家に養子に入っている。また、國一のすぐ下の妹、喜久は1893(明治26)年に川戸の能美家に嫁いだ(俵1953)。俵が父あるいは妹を通して川戸出身で市木村の鍛冶屋であった植田藤太のことを知り、その関係を頼って調査に訪れたとしても不思議ではなかろう。坂の鍛冶屋については、なお不明な点が多いが、邑南町市木小武家城地区の「坂」に所在した鍛冶屋 植野屋であった可能性が高いと考える。

3. 寄贈資料の概要

寄贈資料は、いずれも銑鉄製の神像2・燭台1である。これらは、邑南町市木の植野屋の蔵にあったものとされ、北広島町では神棚に祭られていた。

(1) 神 像

図3-1は、衣冠束帯姿の男神像である。高さは18.5cm、肩幅6.2cm・袂で幅9.7cm、厚さは足元で6.8cmある。鑄上がりはあまり良くなく素朴であるが、冠・袍・表袴を身につけ、笏を両手で持つ姿がよく表現されている。

鑄込みは、下面から数度に分けて行われている。鑄型に湯口は設けられず、下面は開放されており、溢れた湯が厚さ0.8cmの板状になる。その周囲は荒く打ち欠かれ、台座状に残される。また、笏をもつ両手の下や、袖の下には、灰白色をした鑄型土が付着している。

図3-2は、恵比須神像に類似した男神像である。高さ5.8cm、肩幅3.9cm・基部幅4.1cm、厚さは体部で3.1cmある。基部は側面から見ると斜めになり、そ

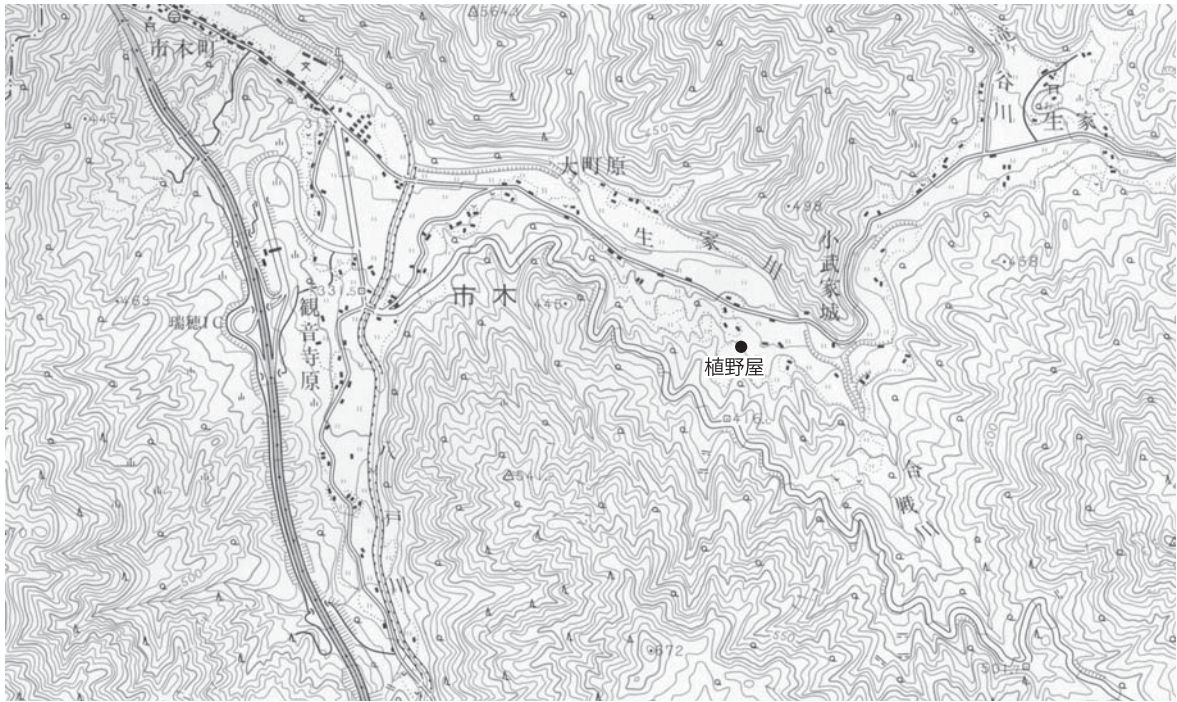


図1 植野屋の位置 (大朝 1:25,000)



図2 「坂」・「上野屋」位置図

のままでは正立しない。

鋳型は正面のみに使われ、背面から鋳込んだものである。鋳上りは良くないが、烏帽子を被り左脇に鯛を抱えて胡座する姿が、不明瞭ながら読み取ることができる。おそらくは粘土製の恵比須神像を原型に使い、それを粘土に押し当てて鋳型にしたものと見られる⁽³⁾。

(2) 燭台

図3-3は、輪切りにした木の放射割れに銑鉄を流し込んで作った燭台である。先端部は欠損するが、ほぼ原状を残しており、高さは12.5cmである。基部は、不整形で幅6.8~7.1cmある。

鋳込みは、基部下面側から行われたと見られ、下面の中央は窪む。基部を上から見ると円形に縁が回るように残ったところがある。鋳型として径10cmほどの小径木が利用されたと考えられる。

4. おわりに

植野屋製鉄関連資料には、銑鉄製の神像と燭台があった。これらは、製鉄・鍛冶の守護神である金屋子神を信仰した鉦・鍛冶屋では良く見られるもので(三宅2004)、植野屋が鍛冶屋であったという伝承を裏付ける。

植野屋は、市木村の字「坂」を所有したことから、『古来の砂鉄製錬法』に記載される坂の鍛冶屋であった可能性が指摘できる。しかしながら、坂の鍛冶屋と植野屋が同じ大鍛冶屋であったことを直接示す史料が見いだせないこと、字「坂」に大鍛冶屋があったことが遺構・遺物からは確認できていないことなど課題が残る。

坂の鍛冶屋は、大鍛冶技術の多様性を検討する上で手がかりとなる事例であり、今後、現地の発掘調査を含めて、さらに検討を行う必要がある。

付記

本稿をなすに当たっては、資料を寄贈して頂いた植田 勲氏をはじめ、能美恭志、吉川 正、角矢永嗣の各氏からご指導、ご援助を賜った。また、寄贈資料の写真は松尾充晶氏の撮影によるものである。記

して謝意を表します。

註

- (1) 『山陰新聞』明治31年9月9日付けには、「鉄鉦の取調のため来濱中の俵工学士は去る五日邑智郡へ向け出発せり」と短信がある。また、『古来の砂鉄製錬法』によれば江津市備谷鉦の調査が9月7日には始まっているので、邑智郡の調査は5~6日に行われたと見られる。
- (2) 植田家では、刀鍛冶の頃は「銑」を加計(広島県安芸太田町)から運んできたこと、金屋子信仰の関係から盥は男女別々に使っていたこと、以前は刀が4振あったが戦争で接収されたことなどが伝わっている。
- (3) 植野屋製鉄関連資料とともに、植田家では粘土製の恵比寿神像と大黒神像が保管されていた。前者は、銑鉄製神像とほぼ同形同大であり、原型となった可能性がある。

参考文献

- 角田徳幸・高岩俊文・東山信治2011「和鋼博物館所蔵 俄國一博士たたら資料」『古代文化研究』第19号 島根県古代文化センター
- 角田徳幸・高岩俊文2014「和鋼博物館所蔵大鍛冶関係資料—大鍛冶作業とその製品の基礎的検討—」『古代文化研究』第22号 島根県古代文化センター
- 俄國一1933『古来の砂鉄製錬法』丸善
- 俵孫一・俄國一1953『我が家の礎』
- 三宅博士2004「金屋子神の神像と供献物」『金屋子信仰の基礎的研究』岩田書院

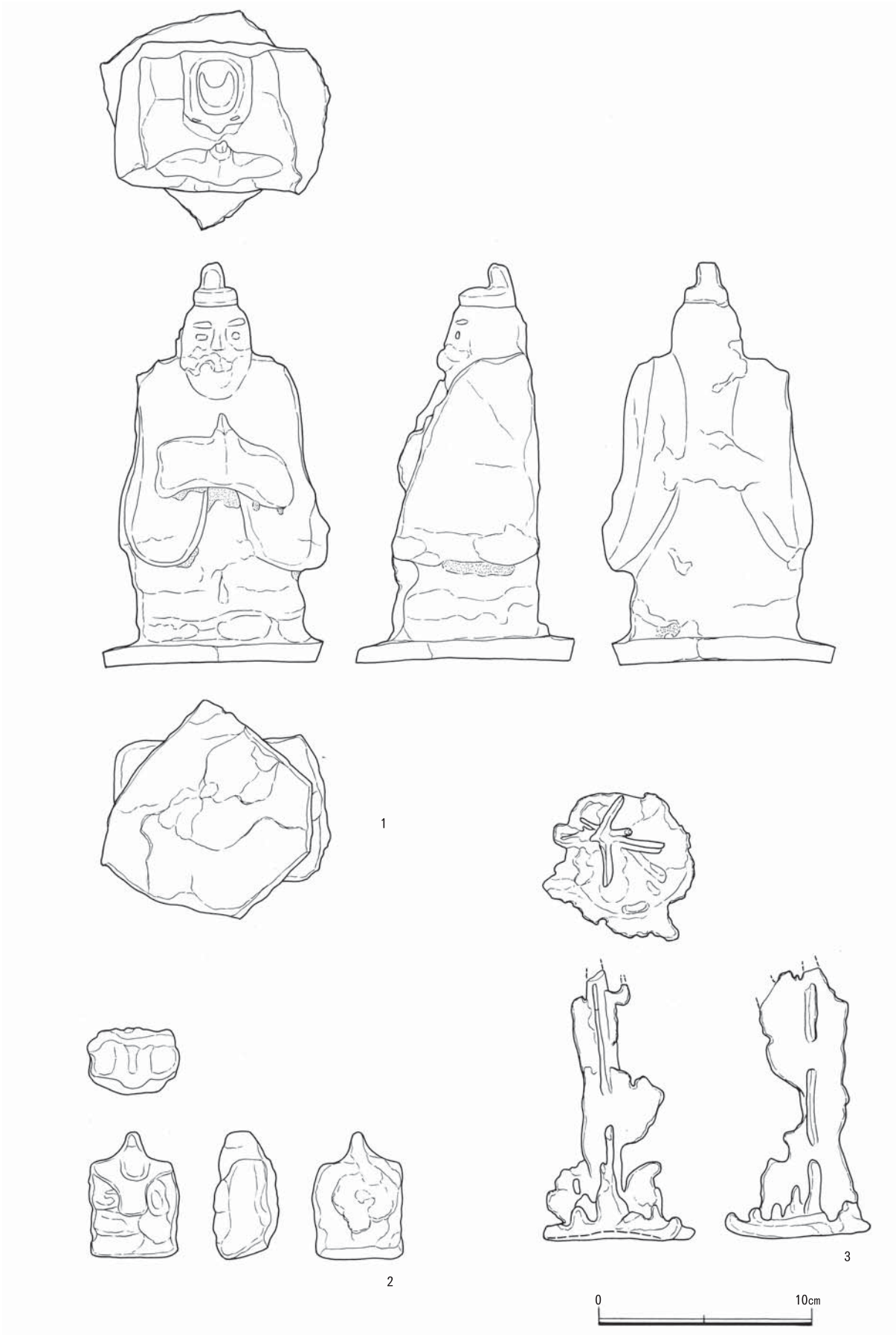


図3 植野屋製鉄関連資料実測図



植野屋製鉄関連資料